

日本におけるハワイ人気の一考察

—日本人移民と日系アメリカ人の歴史を中心に—

A Study of Hawaii's Popularity in Japan

— with a Focus on History of Japanese Immigrants and Japanese Americans —

竹 下 慧

Kei TAKESHITA

はじめに

ハワイ州観光局 (Hawai'i Tourism Authority <HTA>) の調査結果によれば、2019年に日本からハワイへ渡航した詳細な日本人観光客数は157万 6 千205人で¹、昨年を除いた直近10年間でハワイを訪れた日本人観光客数は年間約120万人から160万人の間で推移し、増加傾向にあった²。しかし2019年末から始まったとされる新型コロナウイルス感染症 (以下、コロナ) の流行によって海外旅行を始め、国内旅行さえ行うことが厳しい日々が続いている。そのような中で観光を主たる収入源としていたハワイにおいては、その影響は計り知れない³。コロナのワクチン接種がアメリカを始め、日本でも行われているが、日本国民全員がいつ接種を終えることができるのか全く予想ができていない。そのため日本からハワイへの渡航者数が以前の水準に戻るには、かなりの時間がかかることが想定される。

このような中であるデータを参照したい。一般的に、「日本人はハワイが好きである」と言われている。それを裏付けるデータとして、2021年2月にJTB 総合研究所が男女15歳から60歳以上に対して行った調査の中の質問⁴によれば、全世代において「ハワイが1番人気」という結果になった⁵。

日本とハワイの関係は1868年に最初の移民である「元年者」が渡航して以来150年以上にもなる。日本人のハワイイメージの根底を作ったのは日本人移民であり、日本とハワイの関係を見ていく上で、移民として渡った日本人の存在は避けて通れない。1930年にはハワイ人口の約4割を占める大きなエスニックグループであり⁶、現在でもハワイ州における日系人の人口は上位に食い込んでいる⁷。

本稿においては、今現在「日本人がハワイに対して持っているイメージ」を形成することとなった初期

¹ Hawai'i Tourism Authority (2020), *2019 Annual Visitor Research Report*, Hawai'i Tourism Authority, p. 6.

² トラベルボイス (2020) 『【図解】日本人旅行客数、ハワイ・グアム・沖縄の直近10年間でグラフで比較してみた (2019年版)』 <<https://www.travelvoice.jp/20200414-145733>>

³ 本稿においてはコロナによってハワイにどのような影響があったのかについては言及しない。

⁴ 観光目的の海外旅行が可能になったら行きたい国・地域はどこであるかという質問をした。

⁵ JTB 総合研究所 『「コロナ禍におけるこれからの日本人の海外旅行意識調査 (2021年2月実施)」』 JTB 総合研究所、2021年、6-7頁。

⁶ 在ホノルル日本国総領事館『ハワイ州要覧』在ホノルル日本国総領事館、2019年、8頁。

⁷ Research and Economic Analysis Division (2018), *Demographic, Social, Economic, and Housing Characteristics for Selected Race Groups in Hawaii*, Department of Business, Economic Development & Tourism (DBEDT), p. 2.

の人々である移民とその子孫の歴史を中心に、彼らがどのようなイメージをハワイに対して抱いていたのかについて言及する。そして、太平洋戦争中に日系人が置かれた立場、戦後ハワイの日系人の立場がどう変化したのかを見ることにより、ハワイと日本とのつながり、それらによってもたらされた日本におけるハワイ人気的一端を明らかにすることを目的としている。本稿は筆者の修士論文の一部に加筆修正を行ったものであることをここに明記しておきたい。

第1章 初期日本人移民が見たハワイ

ハワイへの移民が求められたのは、白人との接触によってハワイ先住民の人口が激減したことが一つの要因である。当時のハワイは白檀貿易が終わり、白人によるプランテーション農業の発展期であり、多くの労働力が求められていた。1851年には中国から移民がやってきて「1898年までに4万6000人がやってきた」⁸が、「頑固で排他的習性をもつため、ハワイの社会に禍根を残すものとして、その入国を制限するようになった」⁹このような経緯から、移民を日本に求めることとなる。

ハワイ政府は、日本のハワイ総領事のユージン・M・ヴァン・リード (Eugene M. Van Reed)¹⁰に日本人労働者招集を依頼する。彼は1867年に徳川幕府との間に「日本ハワイ臨時親善協定」を結び、出稼ぎ人300人分の渡航印章(旅券)の下附をうけた¹¹。しかし、日本は1867年に大政奉還が行われ、王政復古の号令も発せられた。そのような背景によって国内は混乱を極めており、明治政府になると印章は無効とされた。1868年5月16日、ヴァン・リードは無許可で「サイオト号」を出帆させ、航海自体は34日間に及び、船には153名の男女が乗っていた。1番最初の日本からの移民である彼らは「元年者」¹²と呼ばれ、彼らは周旋人代理の太田屋半兵衛の、誇大なうまい宣伝にのせられて、「天竺行き」の将来に希望をもっていた¹³。当時の日本国民はハワイについて知っているものもおらず、「大阪見物にも水盃を取りかわす時代のことであるから正体の知れないハワイくんだりまで行く者はいない」¹⁴との表現からも分かるように、移民集めは困難を極めた。「天竺」という表現は、移民がハワイに渡ってからの経験を考えれば正しい表現であるとは言えず、移民者を集めるための誇張表現であったことに間違いはないが、ハワイはいいところであるというイメージを利用していたことが伺える。

「元年者」の中に牧野富三郎という人物がおり、彼は移民のリーダーであった。彼がハワイ到着後の6月27日付でヴァン・リードに送った報告書によれば、ハワイの先住民も大変友好的で、気候も素晴らしく、良いところである¹⁵と報告している。移民はいくつかのグループに別れ、オアフ島以外のプランテーションでも働いた。初期移民の多くは農民ではなく、職人や博打打ちが多かった¹⁶。彼らを待ち受けていたのは「日本の労働慣行とは異なり、炎天下の不なれな十二時間の労働は、彼等には耐え難いものであった。

⁸ 山本真鳥「辺境の開発—プランテーション経済と移民」、山本真鳥・山田亨編著『ハワイを知るための60章』明石書店、2013年、94-98頁、97頁。

⁹ ハワイ日本人移民史刊行委員会(編)『ハワイ日本人移民史』布哇日系人連合協会、1964年、41頁。文献の表記をそのまま使用した。以前はこのような表現が容認されていたものと推察する。決して筆者の主観的意見ではないことを明記しておく。

¹⁰ 近年の表記はユージンとするものが多いが、ここでは『ハワイ日本人移民史』の表記に従った。これより以後ヴァン・リードと表記する。

¹¹ ハワイ日本人移民史刊行委員会(編)、前掲書、41頁参照。

¹² 明治元年にハワイへ渡ったため、このように呼ばれる。

¹³ ハワイ日本人移民史刊行委員会(編)、前掲書、42頁参照。

¹⁴ ハワイ日本人移民史刊行委員会(編)、前掲書、63頁。

¹⁵ ハワイ日本人移民史刊行委員会(編)、前掲書、49頁参照。

¹⁶ 中込眞澄『ハワイを拓いた日本人 伊達な男たちの挑戦』幻冬舎、2016年、50頁参照。

それに労働時間中は、一服休むことも許されず、少し怠けているとルナ（小頭）にムチをもって撲られることもあり 一中略— 苦情百出、絶えず小さな紛争も起り、暑さと失望のあまり自殺する者も三名あった。』¹⁷といった大変過酷な労働環境であった。1885年から始まる初期の官約移民も同じような環境に苦しめられることとなる。状況を鑑みて、牧野富三郎は明治政府に対して「救出嘆願書」を提出している。この文書が提出されたのは、最初の移民がハワイに渡ってから1年にも満たなかった。その後日本から派遣された使節の交渉によって、希望者40名の帰国も実現している。

初期移民は「天竺行き」を夢見ていたが、ハワイにおける労働は奴隷に近い扱いであった。最終的には嘆願書を提出するに至る状況は想像に難くない。このようにして、初期移民は多くの困難に立ち向かいながらも、ハワイで生活した。工藤泰子は「当時のハワイへの日本人渡航者のほとんどが移民であったため、過酷な労働、極貧生活等がハワイのイメージに与える影響を極力排除し、ハワイ上陸時の印象を中心にみていくことにする。」¹⁸としている。しかし「元年者」がハワイに抱いたイメージを、牧野富三郎が上陸時付近に報告したような好印象だけで決定してしまうのは大変危険である。過酷な労働や極貧生活が彼らの現実であったのだから。

1871年に「日布修交通商条約」¹⁹が調印され、日本とハワイは正式な国交を開始する。しかし、移民が再開されるのは1885年であり、その間に様々な努力がなされたが最初期の移民から17年もの間が空いている。85年からハワイに渡った「官約移民」²⁰はハワイに到着後どのような状況に置かれていたのだろうか。1885年に国交ができて初の移民、945人が「シティ・オヴ・トウキョウ号」に乗り、ハワイへ渡った。同年2回目の「山城丸」で988名が渡った。彼らが到着すると「カラカウア王はわざわざ出向いて、日本酒をふるまいフラやハワイアン・ミュージックで慰労した」²¹。この表現からも分かるように日本人移民は快く迎えられたが、商業的とまではいかずとも、フラや音楽が外部向けに利用され始めたことが分かる²²。官約移民として多くの移民がやってきたが、過酷な労働に耐えられず、移民の間では不平不満がたまり、小さなストライキも起こるに至った²³。このような問題が頻発することからハワイ政府は「日本移住民局」を設置し、問題の解決に対処した。上記のことを整理すると、官約移民が受けたハワイのイメージ、おかれた状況は元年者と変化していないということになる。

カラカウア王が出向いたという記述があるが、なぜ彼は自ら移民歓迎を行ったのか。それは、カラカウア王自身が1881年に世界周遊の旅に出て、日本を訪れたことが関係している。彼の訪日は「第一に日本人移民の渡航の実現、第二にやがて王位を継がせる皇姪カイウラニ王女と日本皇族の山階宮定曆親王やましのみやさだまろとのご婚約の申し入れ、第三にそうした日布の友好によって将来太平洋の発展に寄与したい」²⁴という3つの私略があった。以上のことから彼が日本人労働力をどれだけ重要視し、継続的に労働力を欲していたのか、そして王室と皇室を結びつけることにより、欧米列強へ対抗しようとする考えがあったことが見て取れる。婚約には至らなかったものの、訪問が日本との関わりを強いものにするようになったのは間違いないだろう。

¹⁷ ハワイ日本人移民史刊行委員会（編）、前掲書、53頁。

¹⁸ 工藤泰子「日本人移民がみた戦前ハワイのイメージ」『京都光華女子大学研究紀要』京都光華女子大学、第50号、2012年、81-91頁、81頁。

¹⁹ この当時のハワイはまだ独立国家であった。ハワイが併合されるのは1898年であり、州に昇格するのは1959年まで待たねばならない。

²⁰ 官約移民とは、明治政府とハワイ王朝の国交が樹立して以降の正式な移民のことである。

²¹ 中込真澄、前掲書、68-69頁。

²² 工藤泰子、前掲書、83-84頁参照。

²³ ハワイ日本人移民史刊行委員会（編）、前掲書、106頁参照。

²⁴ ハワイ日本人移民史刊行委員会（編）、前掲書、78頁。

第2章 私約移民から移民禁止まで

官約移民後は1894年から「私約移民」²⁵としての移民が始まる。私約移民は1899年まで行われ、4万208名がハワイへ渡っている²⁶。その後は、「自由移民」²⁷として1900年から1907年までに6万8326人が渡っている²⁸。自由移民以前の移民たちは、契約労働者としてハワイに渡っていたが、1898年にハワイがアメリカの領土となったことにより契約が廃止され、多くの日本人がアメリカ本土へと渡るようになった²⁹。しかし、その当時日本は1894年に日清戦争、10年後の1904年には日露戦争に勝利し、アメリカ側はそのような日本人の勢力に対して懸念を示す者も多かった。日清戦争から4年後の1898年に「カフク事件」と呼ばれる、オアフ島カフクにおいて支那人³⁰と日本人の衝突が起こった。この事件は日清戦争に勝った日本人の勢いが増し、支那人との喧嘩が集団暴動になり、支那人3名を日本人が殺したという事件である。このように、ハワイにおいても戦争に起因するような移民間同士のいざこざが起こっていた。

先に述べたとおり、日本人移民の多くはハワイにやってくるというもののほとんどがプランテーションにおいて過酷な労働を強いられ、半ば奴隷のような扱いを受けていた。そのような労働環境において、移民の間では「ホレホレ節」と呼ばれる労働歌ができていった。ホレホレというのはサトウキビの枯れ葉を除去する作業³¹を指し、サトウキビの枯れ葉を手作業で取り除きながら歌い出したため、このように言われる。

「行こかメリケン、帰ろかジャパン、ここが思案のハワイ国」

「頼母子落して、ワヒネ（妻）を呼んで、人に取られてベソをかく」

「三十五仙のホレホレ（枯れ葉とり）取ろより、パケさん（支那人）とモイモイ（ねる）すりゃ、アカヒカラ（一ドル）」³²

ホレホレ節の一部であるが、移民の農地での苦労や、生活の困難さが歌われており、最後の節は女性の風紀の乱れを示している。「ホレホレ節」からも分かる厳しい状況に耐えかねた日本人移民約7000人によって1909年には「第一次ストライキ」が起こされたが、労働者側の敗北で終わった。けれどもこれにより賃金の上昇、半奴隷的な待遇からの開放、生活状況が一部改善され、さらには転業する者も現れた³³。

1900年頃多くの日本人がより良い環境、より良い賃金を求めてハワイからアメリカ（主に西海岸、カリフォルニア）へ渡る者もいれば、日本への思いから帰国する者もいた。一方で、日本からハワイをはじめ、本土への移民も増加していった。ハワイ日本人移民史によれば、日露戦争後に、不況であった日本の農村に成年の男性が増えたこと、戦勝による海外渡航熱の上昇がアメリカ本土への移民を押し上げた要因で、合計は数年で約5万7千人に上る³⁴。しかし、アメリカへの日本人進出が要因となって、カリフォルニア

²⁵ 私約移民とは、民間の会社が移民の取り扱いを行うことである。

²⁶ ハワイ日本人移民史刊行委員会（編）、前掲書、120頁参照。

²⁷ 自由移民と呼ばれる理由として、それまでの契約から解放され、自由な身となったことが挙げられ、背景にはハワイがアメリカに併合されたことが関係している。

²⁸ ハワイ日本人移民史刊行委員会（編）、前掲書、120頁参照。

²⁹ 中込真澄、前掲書、130頁参照。

³⁰ ハワイ日本人移民史刊行委員会編、前掲書、148頁。文献の表記をそのまま使用する。

³¹ 他の作業に比べて比較的簡単であったため、主に女性が行っていた。

³² ハワイ日本人移民史刊行委員会（編）、前掲書、173-174頁。筆者が抜粋した。

³³ ハワイ日本人移民史刊行委員会（編）、前掲書、173頁参照。

³⁴ ハワイ日本人移民史刊行委員会（編）、前掲書、169頁参照。

において1906年に排日運動が激化した。最終的には1908年に日米紳士協定³⁵が締結され、日本側は自主的に移民を制限するに至った。

日米紳士協定によって日本からの移民が制限されるようになると、移民していた男性はこれによって初めて定住を意識するようになり、当時の特異な習慣として、特にハワイにおいては「写真結婚花嫁 (Picture Bride)」³⁶がある。これはハワイに移住している男性が、日本の親類に自分の写真を送り、結婚相手を日本で探してもらい、ハワイに嫁がせるというものである。しかし、多くの日本人男性は、写真の修整、若しくは若い時の写真を送る、最悪の場合、他人の写真を使うといったことを行った。その結果、移住するまで結婚相手の顔を日本へ送られてきた写真でしか知らない日本人女性は、ハワイに到着して初めて生身の結婚相手の男性を見ると、容姿、年齢が全く違うといった事態が頻発した。写真花嫁は1924年の「排日移民法 (Immigration Act of 1924, Johnson-Reed Act)」によって日本人の移民が事実上不可能になるまで続いた³⁷。

最初の日本人移民ストライキから11年後の1920年にはオアフ島において、賃金の上昇などを求めて「第二次ストライキ」が開始された。参加した人数は1万3000人と前回のストライキより大幅に上昇している。その要因として、1ヶ月前にフィリピン人が起こしたストライキが挙げられ、彼らの行動に後押しされ起こった形となる。ストライキには多くの人員が参加したにも関わらず効果が出なかった³⁸。一方、第一次ストライキ時にも転業する者も多くいたが、第二次の際にも同じような現象が起こった。ハワイ日本人移民史では第二次ストライキを「日本人の第二次躍進段階をなしたこと、一中略— 組織能力と、統率力と、団結力を示したことはハワイ日本人発展史上の、大きな記録の一つである。」³⁹と述べており、日本人移民の地位は着実に向上していったことが見て取れる。しかしながら、1924年の排日移民法によって、より一層日本人移民への風当たりが強くなる。更には、1世と2世の間でのアイデンティティに関する反発も起こりはじめた。1世はアメリカ人国籍を与えられなかったが、2世はアメリカ人国籍を持っており、中には「自分は日本人なのか、アメリカ人なのか」という相反する感情の中で葛藤する者もいた。

第3章 太平洋戦争中の日本人移民と日系人

1941年12月7日午前7時55分 (ハワイ時間) 旧日本軍によって真珠湾が攻撃され、太平洋戦争が勃発した。旧日本軍は第1派と第2派に分かれ、真珠湾だけでなくオアフ島に点在するアメリカ軍の基地を攻撃した。攻撃によって2400人の軍人と68人の民間人が犠牲となり、1178人が傷を負った⁴⁰。真珠湾攻撃について油井大三郎は以下のように指摘している。

「パール・ハーバー奇襲」は、アメリカ人の間に、二度と奇襲を許さないような強力な軍事力の構築を肯定する意識とともに、日本人に対する否定的イメージを植え付ける上で、決定的な効果をもったの

³⁵ 日米紳士協約とも呼ぶ。1907年から1908年にかけて成立し、再渡航者、移民中の父母・妻子、農業定住希望者以外には旅券を発行しないとしたものである。

外務省 (編) 『日本外交文書—対米移民問題経過概要 (大正期第二四冊)』外務省、1972年、280頁。

³⁶ 省略し「写真花嫁」とも呼ばれる。「写真結婚 (Picture Marriage)」、「写真婚」といった他の呼称が使用される場合もある。Kayo Matano Hatta (1994), *Picture Bride*, Miramax Films. 工藤夕貴主演のこの映画の中においては、実際の写真とは違ったものを利用する男性の様子や、日本からやってきた女性の苦難や、さとうきび畑での過酷な労働が描かれている。

³⁷ ハワイ日本人移民史刊行委員会 (編)、前掲書、175頁参照。

³⁸ ハワイ日本人移民史刊行委員会 (編)、前掲書、179頁参照。

³⁹ ハワイ日本人移民史刊行委員会 (編)、前掲書、179頁。

⁴⁰ Spiller, Harry (2002), *Pearl Harbor Survivors: An Oral History of 24 servicemen*, Mcfarland & Company, Inc, p. 12. 犠牲者数などに関しては諸説あり。

である。—中略—「パール・ハーバー奇襲」を許したというアメリカ人にとっては「屈辱的な」体験が二度と再び奇襲を許さないような強大な軍事力を、平時においても維持しなければならないという強迫観念を生み出した面も無視できない⁴¹。

真珠湾攻撃の翌日、当時の大統領であったルーズベルト (Franklin D. Roosevelt) はスピーチで、12月7日を“a date which will live in infamy”⁴² (屈辱の日) と形容した。この日を境に日本を「卑怯で野蛮的である」と非難し、挙国一致体制へとアメリカを向かわせ、アメリカが本格的に第二次世界大戦に参戦する。戦争開始によって日本とアメリカは敵国関係になったことによって、日本人移民、日系人は「敵性外国人」として疑いの目が向けられた。

真珠湾攻撃当日から深夜にかけて、FBI と警察、憲兵隊によって日本人有力団体の幹部、宗教家、日本語学校の校長などのリーダー的存在数十名が逮捕された。翌年2月までに200名～300名の日系人が逮捕され、砂島 (サンド・アイランド)⁴³に隔離された。更にはアメリカ本土の収容所へと送られる人も多数おり、本土への輸送船は10回続いた。ハワイ日本人移民史によれば本土へと送られた日系人は、男子694名、婦人8名に上る⁴⁴。アメリカ本土においてカリフォルニア州マンザナーを始めとする日系人強制収容所は有名であるが、言わずもがなハワイにおいてもカウアイ島、マウイ島、ハワイ島などに収容所は存在し、ハワイ島の「キラウエア・ミリタリー・キャンプ (Kilauea Military Camp)」も当時、日系人収容所として利用されていた⁴⁵。一番大きかったものがオアフ島の「ホノウリウリ日系人収容所 (Honouliuli Internment Camp)」であり、多い時で約400名の戦争捕虜、4000名以上の囚人が抑留されていた⁴⁶。また、第二次世界大戦が終了するまでにアメリカに対して危害を加えない2000名以上の日系人がホノウリウリに抑留されていたことも分かっており、2002年に「ハワイ日本文化センター (Japanese Cultural Center of Hawai'i <JCCH>)」によって収容所跡地が発見され⁴⁷、それから今に至るまで発掘と保存がなされている。2015年にはオバマ大統領によって国定史跡にも指定された。当時のハワイ人口の約4割が日系人であったことから、日本人移民、日系人全員が強制収容されることはなかった。小川の「ハワイで強制収容された人々やその家族に対し、周囲は批判的な眼差しを向け、疎外した。そうすることによって、自らの『潔白』を証明しようとしていたのかもしれない。このような心理的束縛を考えれば、本土西海岸と異なって一見『自由』な生活を送ることが出来ていたハワイの日本人、日系人、にとって、戦時中のハワイは島ぐるみの収容所とでも言うべき場所であった⁴⁸」という島全体が収容所であったかのような新たな視点も検討の余地がある。

太平洋戦争中に日系人が差別的な扱いを受けていたが、多くの2世や3世の日系人は、アメリカ人としてのアイデンティティを形成していた。そのような状況下において彼らは軍に志願することによってアメリカ人としての愛国心を表した。徴集兵によって編成された「第100大隊 (100th Infantry Battalion)」と志

⁴¹ 油井大三郎『戦争観はなぜ衝突するか—日本とアメリカ』岩波現代文庫、2007年、57-59頁。

⁴² Library of Congress (発行年不明), “Speech by Franklin D. Roosevelt, New York (Transcript).” <https://www.loc.gov/resource/afc1986022.afc1986022_ms2201/?st=text>

⁴³ オアフ島に存在する島。現在ではコンテナ街になっている。

⁴⁴ ハワイ日本人移民史刊行委員会 (編)、前掲書、188-190頁参照。

⁴⁵ 渡邊真人 (編)『ハワイスペシャリスト検定公式ガイド—学ぶほどにハワイがもっと好きになる!』樫出版社、2016年、46頁参照。

⁴⁶ National Park Service (2019), “Honouliuli Historical Overview.” <<https://www.nps.gov/hono/learn/historical-overview.htm>>

⁴⁷ National Park Foundation (発行年不明), “Honouliuli National Historic Site.” <<https://www.nationalparks.org/explore-parks/honouliuli-national-monument>>

⁴⁸ 小川真和子「太平洋戦争中のハワイにおける日系人強制収容：消された過去を追って」『立命館大学文化研究』、立命館大学国際言語文化研究所、第25巻、1号、2013年、105-118頁、115頁。

願兵によって編成された「第442連隊 (442nd Regimental Combat Team)」がある。第100大隊にはハワイから1400名以上が徴兵された。第442連隊は1500名の募集人数に対し、9500名の応募があり、2600名が入隊することとなった。うち本土からの志願兵は800名であり、ハワイからの志願兵が半数以上を占めていた⁴⁹。日本をルーツに持つ日系人で組織された部隊であったため、日本との戦いには派遣されず、第442連隊は“Go For Broke” (当たって砕けろ) をモットーにヨーロッパ戦線で激闘を繰り返し、アメリカ陸軍史上最も勲章を受けた部隊と呼ばれている⁵⁰。戦後は当時の大統領であったトルーマン (Harry S. Truman) によってホワイトハウスに招かれ、称賛された。

太平洋戦争前から日本人、日系人への風当たりは強かったが、それ以上に戦時中の扱いは想像を絶するものであった。海を渡った日本人と子孫は炎天下のプランテーションで何十時間も働き、時には風紀が乱れることもあった。そのような中でハワイへの永住を覚悟した者もいた。戦時中は収容所に送られる一般人もおり、軍へと志願することでアメリカに忠誠を誓い、戦地で命を落とし、ハワイへ戻ることができなかった日系人の若者も大変多かった。そのような歴史を経験してきた移民、日系人からするとハワイは決して楽園ではない。現在のアメリカ、特にハワイにおいて日系人の地位が確立されているのは戦時中に多大なる犠牲を出した部隊の影響も否めず、日系帰還兵は政界にも進出した。それによってさらに日系人がハワイにおいて活躍の場を広げられるようになったのは疑いようのない事実である⁵¹。

おわりに

日本人移民は「天竺」を求めてハワイへ渡航したが、実際のところ白人指導者などに抑圧され、またお金もなく帰国することすらできなかった。しかし前述の通り、ハワイに残ることを決めた日本人移民の存在がハワイのエスニックグループに大きな影響を与えた。

太平洋戦前にハワイを訪れた日本人を出迎えた日系人に関して、矢口は「かれらを迎えた現地の人の大半は、日本からの移民とその子供たちであったからこそ、そこに『日本の生活』があったのは不思議ではない。俳句を詠む人びとや仏教講話に関心を示す者が『日本らしい』生活を送っていたのはある意味当然のことだった。」⁵²と述べている。だが、果たして「俳句を詠む人びとや仏教講話に関心を示すもの」だけが「日本らしい」生活を送っていたのだろうか。今まで本稿において述べてきたことから推察するに、多くの日本人移民、日系人は程度の差はあっても「日本人としてのアイデンティティ」や「日本への思い」を持ったまま、生活していたのではないだろうか。

太平洋戦争によって一時は断絶した日本とハワイの関係であるが、戦後にハワイを訪れた人びとと日系人の関わりの様子を矢口は以下のようにも説明している。

ハワイに住む日系人は、日本からの訪問客を温かい心で迎え入れるのみならず、敗戦国日本から恐る恐るやって来る人びとを、旧敵国アメリカへと橋渡しをする仲介役も果たしていた。 —中略— 日本からハワイを訪れた者にとって、アメリカ文化を享受し、アメリカ社会で生きる日系人の活躍は心強いものであった。アメリカが主導する占領政策のもとで、また東西冷戦下にアメリカの軍事力と経済力のもとで国家復興を目指す日本人にとって、ハワイにおける日系人の社会的成功は、大きな励

⁴⁹ 中込真澄、前掲書、158-160頁参照。

⁵⁰ 矢口祐人、森茂岳雄、中山京子『入門 ハワイ真珠湾の記憶—もうひとつのハワイガイド』明石書店、2007年、43頁。

⁵¹ ハワイにおける日系人政治家の代表的な例として、ダニエル・イノウエ (Daniel Ken Inouye)、ジョージ・アリオシ (George Ryoichi Ariyoshi) を挙げておく。

⁵² 矢口祐人『憧れのハワイ—日本人のハワイ観』中央公論新社、2011年、42頁。

⁵³ 矢口祐人、前掲書、111-113頁。

みであるとともに、今後の日本人の道標にも思えたのであった⁵³。

日系人がハワイと日本の距離を縮める一因となったのは、上記の引用からも容易に想像ができるであろう。現在の日系人は世代が進み、5世や6世などが多くなり、DBEDTの調査によれば、ハワイ州の人口136万301人に対して、日系人の割合が18万5千502人と上位3位となっている⁵⁴。加えて、2017年に筆者がハワイにおいて日系3世と4世へのインタビューをおこなった際に、「正月には雑煮を食べ、夏には盆ダンスがある」との回答を得た。このことから、日本からの文化は未だに引き継がれており、大事にされていることが見受けられる。

現代の文化的側面においては、日系ウクレレ奏者の「ジェイク・シマブクロ (Jake Shimabukuro)」が有名であり、その他にも芸能人の「すみれ」やモデルの「長谷川 潤」などハワイと日本の架け橋となる人物が数多く存在している。もし、日本人が移民としてハワイへ渡っていなかったとしたら、今現在の日本におけるハワイ人気はなかったのかもしれない。日本人移民、その子孫である日系人の歴史というのは、ハワイと日本の関係そのものの歴史と言っても過言ではなく、それ故日本人移民、日系人が果たした役割は大きい。

今後は日本人移民がもたらした数多くの文化が現在に至るまでにどのような変化が起こっているのか、何が残り、何が衰退したのか。「グローバル化した文化」や「グローカル化した文化」などに着目した研究も行いたい。

参考文献 (アルファベット順)

日本語

外務省 (編) 『日本外交文書—対米移民問題経過概要 (大正期第二四冊)』 外務省、1972年

ハワイ日本人移民史刊行委員会編 『ハワイ日本人移民史』 布哇日系人連合協会、1964年

JTB 総合研究所 『「コロナ禍におけるこれからの日本人の海外旅行意識調査 (2021年2月実施)」』 JTB 総合研究所、2021年

工藤泰子 「日本人移民がみた戦前ハワイのイメージ」 『京都光華女子大学研究紀要』 京都光華女子大学、第50号、2012年

中込眞澄 『ハワイを拓いた日本人 伊達な男たちの挑戦』 幻冬舎、2016年

小川真和子 「太平洋戦争中のハワイにおける日系人強制収容：消された過去を追って」 『立命館大学文化研究』、立命館大学

国際言語文化研究所、第25巻、1号、2013年

渡邊真人 (編) 『ハワイスペシャリスト検定公式ガイド—学ぶほどにハワイがもっと好きになる!』 樞出版社、2016年

矢口祐人 『憧れのハワイ—日本人のハワイ観』 中央公論新社、2011年

矢口祐人、森茂岳雄、中山京子 『入門 ハワイ真珠湾の記憶—もうひとつのハワイガイド』 明石書店、2007年

山本真鳥・山田亨編著 『ハワイを知るための60章』 明石書店、2013年

油井大三郎 『戦争観はなぜ衝突するか—日本とアメリカ』 岩波現代文庫、2007年

在ホノルル日本国総領事館 『ハワイ州要覧』 在ホノルル日本国総領事館、2019年

英語

Department of Business, Economic Development & Tourism (2020) *2019 The State of Hawaii DATA BOOK A Statistical Abstract*, Department of Business, Economic Development & Tourism (DBEDT).

Hawai'i Tourism Authority (2020), *2020 Annual Visitor Research Report*, Hawai'i Tourism Authority (HTA).

Research and Economic Analysis Division (2018), *Demographic, Social, Economic, and Housing Characteristics for Selected Race Groups in Hawaii*, Department of Business, Economic Development & Tourism (DBEDT).

Spiller, Harry (2002), *Pearl Harbor Survivors: An Oral History of 24 servicemen*, Mcfarland & Company, Inc

⁵⁴ Department of Business, Economic Development & Tourism (2020), *2019 The State of Hawaii DATA BOOK A Statistical Abstract*, Department of Business, Economic Development & Tourism (DBEDT), p. 67. この場合は純血のデータを参照している。混血になっている場合を含めると31万2千292人にまで増える。また、2020年に出された報告書ではあるが、2010年のデータを元にされているため、10年間で混血化が進んでいることが予想される。

参考サイト（アルファベット順）

日本語

トラベルボイス（2020）「【図解】日本人旅行客数、ハワイ・グアム・沖縄の直近10年間をグラフで比較してみた（2019年版）」 <<https://www.travelvoice.jp/20200414-145733>>（2021年6月17日最終アクセス）

英語

Library of Congress（発行年不明）, “Speech by Franklin D. Roosevelt, New York (Transcript).” <https://www.loc.gov/resource/afc1986022.afc1986022_ms2201/?st=text>（2021年6月17日最終アクセス）

National Park Foundation（発行年不明）, “Honouliuli National Historic Site.” <<https://www.nationalparks.org/explore-parks/honouliuli-national-monument>>（2021年6月17日最終アクセス）

National Park Service（2019）, “Honouliuli Historical Overview.” <<https://www.nps.gov/hono/learn/historical-overview.htm>>（2021年6月17日最終アクセス）